

《留学生から》

日本の印象 — 過去・現在・未来

ディア ソット アリボ (化学専攻・修士課程1年・フィリピン)

私は東京大学海洋研究所で海水中のインジウムの研究をしています。

私の最初の日本についての印象は第二次世界大戦の映画より得られたものです。そこには日本人がフィリピン人の自由と独立を奪い、我々の勇敢な自由と愛する人民を鉄砲と拷問で殺し植民地化する輩で、赤ちゃんを空中に投げ上げ銃剣で突き刺す様子が描かれていた。

その後、1980年代と1990年の初めに、私は日本をToyota, Honda, Sony, Mitsubishi 等のブランド名や、またテレビ漫画番組の Atom Boy, Voltez 5, Teenage Mutant Ninja Turtles 等の名前により知りました。カメラを下げた日本人が私の島セブに来る。彼らは最上のバスに乗り、最上ホテルに泊まり、海岸に行き、ゴルフ、Scuba Diving、買い物をする。彼らはお金を持ち、個人的に静かで、セブ人の邪魔をしないととても良い旅行者です。それゆえ、私は第二の印象として生活を楽しむお金持ちの人々の住む工業的に発展した日本を想像していた。日本政府から奨学金を頂く事になり、成田空港に到着した。私にとって日本が最初の外国でした。また、私が頂く事になっている奨学金1か月分でフィリピンでは6か月くらゐ事が出来るので、豪華な生活を期待しました。しかし、私の奨学金は日本に来て生活するとやっと生活できる程のお金でした。このことから、私はセブに来ている日本の旅行者が最上級の生活を私の国で出来る事を知った。殆どの日本人が小さく狭い部屋に住んでい

てほんの僅かの人が芝付きの家に住んでいる事を知った。

道路、橋、完全な輸送機関と大変素晴らしいものがある。しかし、これは普通の日本人の生産の結果です。私は列車に乗っても、きっちりと目的地に行く事が出来る。残念なことに、朝夕の時間にはまるで、ニシンのようにならないかなければなりません。しかし、これもみんなが時間を守ろうとする事によるものなので、社会にいい結果をもたらしているのかも知れません。

一日10時間以上働いている人が住んでいる国は日本以外に有るでしょうか。その繊細な手や頭脳はほんの僅かの休みで回復するのでしょうか。

私は成し遂げるまで寝ないと言う、日本の戒律に驚嘆する。彼らはいわゆる正しいやり方でそれを行う必要がある。文書になっていない慣習に従わなければなりません。外国人が日本で生きるためには第六感を働かせ気持ちを読まねばなりません。

私は日本に来て日本人が感傷的な人々である事を知りました。私が出会ったたいていの日本人は、静かで、良く助けてくれ、しばしばshyな人々です。

日本民族の中にも悪い人もいるはずですが。私は日本でいい人にしか会わなかったのが、幸せです。

これからもこの幸せが続くことを願っています、しかしながら疑問に思った事はこれからも質問したり、フィリピンのことを回りの日本人に話していこうと思っています。



東京大学で私の研究者生命が始まった

孟

宇 (物理学専攻・博士課程3年・中国)

〈大学院での第一目的は研究〉

東大に入ったのはもう5年前のことである。大学を卒業し、会社に就職していた私は研究者になろうと思い直し、大学院修士課程に入った。大学院に入学したばかりの時、日本語があまりうまくなかったため、研究室の皆の会話に付いていくのは大変だった。そして、生物物理の分野では、生化学、生物学の知識がたくさん必要で、物理学出身の私は、論文を読んでも殆ど分からなかった。器具のピペットマンの存在すら知らなかった。いろいろ大変であったが、毎日忙しく充実していた。

私が従事している研究は、筋肉の収縮機構。具体的には、筋肉の細いフィラメントの三次元構造、蛋白質構成及び生理的な機能を解明することである。いままで、細いフィラメントに関する研究は、天然の細いフィラメントの抽出困難のため、多くの研究は再構成の細いフィラメントを用いていた。筋肉の中から、どうやって天然の細いフィラメントを分離できるかが一番の難問だった。毎週ウサギから筋肉を採っていろいろな方法を試みた。どういう実験すればいいかを帰りの電車の中でも考え込んでいた。そしてついに、高イオン強度の条件下の密度勾配超遠心分離法を用いて筋肉から、天然の細いフィラメントの分離に成功した。この天然の細いフィラメントの分離は世界で初めてであり、Journal of Biochemistry に発表した。初めての投稿論文がアクセプトされたとき、言葉で表しきれないほど嬉しかった。新しい研究者の誕生であると自分勝手に思った。分離した天然の細いフィラメントの立体構造を明らかにするため、氷包埋電子顕微鏡法で撮影し、電子顕微鏡写真を画像処理して、三次元再構成を行った。その結果、いままで観察されなかったネブリンとアクチンの結合部位が観察された。この結果を去年アメリカで開催されたゴードンカンファレンスで発表し、各国の科学者の注目を集めた。

東大の大学院に入って、研究環境が整えられていることを実感した。その上、先生、助手、技官、院生まで、スゴイ優秀な人ばかりで、実験がうまく行かないとき、アイデアから実験技術まで助けてくれる手がいっぱいあるということである。この環境で、実験していい成果を挙げないと、自分自身に対しても申し訳ない気がする。

〈研究する前にまず言語障害を越える〉

母国にいるとき、全然問題にならないことが外国にいくと大問題になる。最初若林研に入ったとき、日本語がとても下手だった。セミナーを聞いても、言葉が殆ど分からなかった。知らない言葉がでたら、これは専門用語なのか、日本語の一般用語なのか、区別が付かない。日本人の議論は早口言葉に近く、特に、論理ズキの先輩の

何重否定の言葉が全然理解できなかった。電車の中で日本人の子供たちの会話を聞いて、「留学生って、不思議だね。知識としては大学卒かも知れないが、言葉としては小学校も卒業できないのではないかな」と思った。日本語ができないとセミナーが分からないし、他人と議論もできないし、日本語の参考図書も読めない。特に、日本生物物理学会と日本物理学会の発表のとき、一番プレッシャーを感じた。口頭発表のとき、発音がまずかったら、聴衆に伝えられない。きちんと説明するために、原稿を朗読してはいかなくて、自分の言葉で説明しなければならない。発表最後の質疑討論では、質問の真意を正確に理解するのも大変。一回目の生物物理学会の口頭発表のために、タイマーに向かって20回ぐらい練習をした。結局、発表内容を完全に暗記してしまった。

こういう言語障害が去年アメリカのゴードンカンファレンスで発表するときも感じた。中学校から、ずっと英語を習っていた。しかし、日本に来て2年後、私の日本語レベルが英語を逆転した。特に会話では、日本語がどんどんうまくなって、英語の方がうまくなならないというより、長期間使っていないため、せっかく覚えた言葉を忘れてしまったのである。ゴードンカンファレンスのとき、西洋人と議論するのに苦労した。特に、各国の研究者が集まっていたから、母国語訛りの英語も聞き取れなければならない。いまの自分の英語では、とても演壇に登って、英語で発表する勇気がないと思った。これから、いろんな国際会議に参加することが増えるだろうから、日本語を覚えながら、英語も勉強しなければと感じた。

〈得たのは研究成果だけではない〉

日本に留学して、専門知識以外に本から得られないものもたくさん得た。日本人の方と一緒に研究し、世界の事、日本の事、身近のことにに対して意見を交換し、日本文化に接し、自分の人生の中で、新しい世界が広がっている。中国、日本の習慣や文化の違いを時々感じるが、人の心の底からの多分全人類共通のものも常々感じている。人に対するやさしさ、誠意、お互いに理解しようという努力。留学生として、日本文化に対する理解は、決して1年、2年で得られるものではない。長期間、日本で生活し、だんだんに日本に対する理解が深まって行く。そして異文化の理解だけではなく、自分の人生観もある程度修正される。

特に言いたいのは私の指導教官若林健之先生（私が東大に入る前から、いままでずっとお世話になっている先生）のことである。東大に入ったばかりの時、奨学金もアルバイトもなくて、生活に困っていた時、若林先生がコンピューターのアルバイトを見つけて下さった。研究

から日常生活まで、いろいろ面倒をみて下さって、私はいまの研究成果ができた。私が国内及び海外の学会に発表できるのも、投稿論文を発表できるのも、若林研のいろんな人々のお陰である。東大で研究に関する知識を身につけただけではなく、私の研究者生命が始まったと言えるだろう。

一人前の研究者になるのは、専門知識と実験以外にいろんな能力が必須だと思う。自然科学の研究対象が客観的に存在するが、研究者は人間なので、どうしても研究

結果を評価するときに主観がはいる。自分の主観を抑えて、客観的に研究をするのが大事である。将来どういう研究をするのも自分で決めなければならない。そして、他の研究者と協力、交流するとき、人間関係が交じってくる。研究の自然現象に対し、自分自身に対し、他人に対し、よく把握できないといい研究ができないと思う。大学院に入って5年間で理学博士号を取れるとしても、人生の博士号を取れるのは何年間いるだろう。

